文化の一形式としてのスポーツの構造に関する一考察 — E. カッシーラーの文化論から —

高 松 昌 宏 (筑波大学)

A Study of the Structure of Sport as a Cultural Form
— A Study based on E. Cassirer's Philosophy —

Masahiro TAKAMATSU

The University of Tsukuba
1-1-1, Tennodai, Tsukuba, Ibaraki, 305, Japan

Abstract

The purpose of this study is to clarify the direction to understand the structure of sport as a cultural form. The following steps were adopted as the necessary procedure to attain this purpose ;

1) To verify the appropriateness of eliminating value-oriented ranks among cultural forms while studying the nature of each cultural form.

2) To examine the difficulties in considering the structure of sport as a culture from the viewpoint of the concepts of culture so far adopted, and to develop a new standpoint to see the structure of sport through this examination.

3) To find out the direction to understand the structure of sport based on this new standpoint. In order to attain the purpose, the frame of E. Cassirer's philosophy was adopted in this study.

Since 1960's there has been a growing tendency to recognize sport as a culture in Japan. This tendency seemed to arise from an intention of enhancing the value of sport to be ranked with other cultural forms. However, it is obvious that all cultural forms have been formulated with close relationships among themselves, and each form has constructed its own constitution which is irreplaceable with another cultural form. Each form exists as a function indispensable to human nature which put meanings on chaotic impression of the world. In other words, they exist only as differences without any value-oriented ranks. Since value is usually set on an object according to a special criterion derived from several human tendencies, we should consider the object itself without its value if we try to study its nature. Therefore, to grasp the nature of a cultural form, it should be examined without consideration of its value-oriented rank.

In Japan, distinctive qualities or administrative characteristics of sport phenomena have been referred to as the structure of sport. However, the structure of sport as a cultural form can not emerge through the

study of these apparent aspects of sport since the structure and phenomena exist on different levels.

In sport, skill is objectified as movement styles. Although a movement style phenomenally disappears according to the end of the performance, it is, in fact, developed to a high degree in the movement subject or in other subjects who come in touch with the movement style. On the phenomenal level, one's skill exists within his organic limitations. His skill is, on the structural level, inherited beyond his organic limitations and will be continuously developed and objectified as new movement styles in sport. In other words, sport has its structure in which objectified skill and its spirit are continuously developed in a dialectic system to higher level. And organizational changes on one's organic level will reach to organizational formation of humankind, such as economic system, through sport as a cultural form. Therefore, it seems that sport exists as a function which has its own continuous and creative structure concerned with the nature of humankind.

1. はじめに

文化としてのスポーツ認識はすでに一般化しており、この認識の傾向のなかには、運動文化論、スポーツ文化論、身体文化論などをあげることができる。これらの各論の内容はその概念規定の多様さからそれぞれ異なっているが、^{注1)}それぞれの立場においても、文化としてのスポーツの力動的な構造に関しては明確に述べられていないようである。そこで本研究の目的は、文化の一形式としてのスポーツの構造理解のための方向を明らかにすることにある。この目的遂行のために採られる手順は次のようである。1) わが国における文化としてのスポーツ把握を推進する潜在的な動因ともいえる諸文化間の価値的な階層化について吟味し、文化を学問的研究の対象とする際にこのような価値付けを排除することの正当性を明らかにする。2) これまでに文化としてのスポーツ把握をする際に依拠された文化概念を概観することによって、そこに見られるスポーツの構造解明の際の問題点と解明のための方策を探る。3) 2)における考察に基づいて文化としてのスポーツの構造を理解すべき方向を求めるが、その際、カッシーラーの諸文化の考察枠組みに依拠することとする。その理由は、彼の象徴概念を用いた人間文化の諸形式の構造分析が、この課題に有効な解決の方向を示していると思われるからである。

2. 文化としてのスポーツ把握の根底にある価値付け

周知のように、スポーツが文化であるとの主張がわが国において盛んに行われるようになってきたのは1960年代以降のことである。しかし、このような傾向が生起してきた根底には、近藤が「日本におけるスポーツや体育が…文化として低い次元に低迷していたのであるが、今こそこれらのものを再検討し、新たな次元において他の諸々の文化に伍して、社会、人類の幸福と繁栄のために、運動文化を確立し、定位づけ、独自の文化価値を創造せんとする歴史的転機の自覚によるものと思われるのである」¹⁾ (下線：筆者) と運動文化の提唱理由を述べているように、体育、スポーツ研究者の間で、芸術、宗教、科学等の諸文化間の価値付けがなされ、これらの文化の諸形式よりも「劣る」と意識されたスポーツの価値を高めようという意図が潜んでいたようである。このような諸文化間の価値的な階層化の生起した理由には、当時、スポーツが学問的研究の対象として十分に認識されていなかったということと共に、唐木が「文化といえは、高尚なものであり、芸術や科学、宗教などの精神的な活動をさす場合が多かった。スポーツのようなその場かぎりの身体的な活動は文化の仲間に入れてもらえなかった」²⁾ (下線：筆者) と述べているように、精神的な活動のみを文

化とみなそうとした伝統的な文化観の存在もあったようである。しかし、このような文化観は現在においても我々の意識の根底に潜在しているとも考えられる。このことは、唐木が『スポーツの概念』のなかで「文化としてのスポーツ」というテーマを掲げた理由の一つとして、「わが国における文化概念が、依然として…いわゆるドイツ的な知性主義にしばられているからかもしれない」³⁾（下線：筆者）と述べていることからもうかがえる。つまり、知らず知らずのうちに、我々は意識の中に知性的なものとそうでないものとの価値的な階層付けを取り込んでいたのである。しかし、このような意識は、江橋が、「もし運動文化論という高尚で、体育とかスポーツとか身体というとか低級であると考えたとすれば、それは、そのような人自身が知育偏重を是認しているのか、あるいは体育指導者自身がもつ劣等意識を自分では気がつかないで露呈しているかのいずれかである」⁴⁾と述べているように、本来、情的で価値判断の伏在する非理性的なものであると考えられる。また、佐伯も示唆している⁵⁾ように、古くから存在するスポーツに対するいわれのない差別的見解が、文化人に対するスポーツマンのこのような潜在的なコンプレックスを生み出し、結果としてこのような価値付けに至っていると思われる。

では、諸文化形式を学問研究の対象として見る場合に、ここでみてきたように、もともとそれぞれが価値を伴っていると認め、その価値にしたがって、例えば、スポーツは芸術の下位に位置付けられるというような階層付けをすることは妥当なことであろうか、カッシーラーは、文化を人間の人間化への基本条件として捉えている。⁶⁾このような条件は、言語、宗教、芸術、科学などの様々な文化形式として分岐しており、発生論的にみてもこれらの諸形式はすべて密接に絡み合って形成されてきたことは疑いえないであろう。^{注2)}これらの諸形式^{注3)}は、どれも他の形式に全く同一化されたり、他の形式から導出されたりすることはなく、それらの各々がある特定の精神の把握の仕方をしており、現実的なものの独自の一側面をその形式のうちに、またその形式を通じて構成している⁷⁾と考えられよう。つまり、各々の文化形

式はそれぞれ独自の生成の法則を持ち、例えば、芸術であれば芸術独自の現実把握がなされ、その把握は芸術という形式のうちに、またそれを通してのみ構成されているのである。また、言語の例をあげると、言語を使用する以前には、我々の世界は概念によって分節化されていない連続体であったのであるが、言語という網を通すことによって、概念として様々に切り取られてきたのである。カッシーラーは人間の精神機能^{注4)}を「諸印象の世界を、純粋に精神的な表現の世界へとつくり変える」⁸⁾ものとして捉えている。これは最初は混沌とした諸印象としてしか存在しなかった世界を分節化し、意味付与することであるが、その機能は様々な文化形式を通して果たされるのである。このように考えると各文化の諸形式はこのような精神機能の一翼を担っており、各形式は、精神がその客観化において辿る、分岐した道筋の一つ一つとして捉えることができよう。この意味において、文化の諸形式の一つ一つはすべてそれぞれの内的な差異を保ちつつ、諸印象の世界を客観化するという我々の精神機能の欠くことのできない部分として存在しているのである。これを図示するとすれば図1のようになるとと思われる。つ

図1：差異として存在する各文化形式

まり、文化の諸形式の一つ一つはそれぞれ人間のある能力の客観化を通して、単なる現象に意味を付与する機能として、事実、存在しているのである。そして、このような機能としての諸文化形式間には何ら相対的な価値は含まれてはいないのである。もちろん、ある特定の社会の中で、文化間において価値付けをすることは不可避免的に生ずる現象であるが、このような価値付けは文

化そのものにその根拠があるのではなく、時代や状況の中での特定の判断基準に従って成されるものであり、いわば文化のコノテーションともいうべきものである。コノテーションとは、言語についていうなら、その個々の語に対してもつ個人的な、またはある集団に共通な情感的イメージであり、その個人や集団によってその語に対するイメージは様々に異なるものである。従って、スポーツの構造を見ようとする場合、価値判断やコノテーションを通して見る限り、スポーツそのものは見えてこないということになる。スポーツをそれ自体として認識しようとするなら、今までなされてきたような他の文化形式との価値的な階層化を排除するという手続きが必要となるのである。つまり、スポーツは他の文化形式と並列的にならぶ文化の一形式であるという認識が「文化としてのスポーツ」理解の前提とならねばならないのである。そこで次節では、価値的な階層化から離れて文化としてのスポーツ把握について論じられる。

3. 文化の一形式としてのスポーツ把握

文化の一形式としてのスポーツの構造を把握しようとするにあたって、まず、ここではこれまでのような文化概念に依拠してスポーツが文化として把握されているのかを概観し、そこからスポーツの構造を解明する際の問題点が探られる。

わが国の文化としてのスポーツ把握の背景にある文化観の一般的なものとして、固定的な存在として文化を捉えるものが見られる。このような文化把握の典型的な例としては、前川が「一般に文化とよばれるものは、自然に生まれたものではなく、人間によって作り出されたものである。科学、芸術、宗教、政治、経済など、人間が生活の必要から作り出したものであり、その限り自然に対立するものである」⁹⁾と述べているものがあげられる。彼は、運動文化と呼ばれるものもこの定義に合致し、その構成内容の一つとしてスポーツを位置付けている。この定義は彼自身も「一般に」と断っているように、いわゆる通俗的な文化の定義

であり、このような定義によって明らかにされている文化の性格は我々が通常文化財と呼んでいるものに他ならない。つまり、簡単に言えば、人類がその歩みの過程で、作り出し、外在化したものの総体である。このように文化を捉えると、文化が先人によって生み出され、我々の前に所与として存在しているという事実は確かに明らかにされるのであるが、所与として静的に存在しているのか、あるいは何らかの形で動的に存在しているのかに関しては論じることができないのである。文化は周知のように世代を超越して存続しているものである。したがって、文化の構造を解明しようとするならば、このような固定的な把握だけでは不十分であると言えよう。

このような文化把握に対して、主体の側のある対象に対する実践をも文化として捉えようとする考え方がある。たとえば、唐木は、知的な生産物を文化と考える伝統的な文化概念ではなく、生活過程全般にわたって文化の範疇を拡大したとき、はじめてそこにスポーツをも包括する文化概念が成立すると捉え、岩崎の文化概念に依拠し、「所与としての文化」に働きかけ、取り組む「活動としての文化」について述べている。¹⁰⁾唐木は、「活動としての文化」は既存の文化財、文化遺産を享受するだけでなく、新たな価値をそこに付与させる創造の行為であり、文化の発展を保証し、この行為によって「所産としての文化」が生み出されるという。つまり、私たちが文化とのかかわりをもつときには、「所与としての文化」→「活動としての文化」→「所産としての文化」という一連の連関をたどることになるという。¹¹⁾彼は、このような「活動としての文化」という視点を確立することによって、スポーツが人間の創造力の発現であり、自己実現の活動であるということが見えてくると考えているのである。つまり、現象として現れている主体の側の行為そのものが文化として把握されているのである。このように現象形態を文化に包摂することによって、確かに彼の言うように通時的な文化の発展を見ることができるようになる。つまり、既存の文化として不変のものであるようにみえるスポーツも実は歴史的に見るとルールなど、その内容が様々に変容してきている

ということが理解できるのである。しかし、文化の内容が通時的に変化するという場合に、その変化を現象レベルにおいてのみ把握すると、その構造を見る際には困難な問題が生じてくるようである。そこで、次節ではこの問題に触れつつ現象形態と構造の区別について論じられる。

4. スポーツの現象形態と構造の区別について

唐木はスポーツの内的な世界を明らかにするために「あそび」の理論が一定の有効性を持っていることを指摘しつつ、その限界をも示唆し、スポーツの構造を考える際の一つの枠組みを提示している。彼は、「日常の世界とスポーツの世界を完全に二分する構造でスポーツを構想するのではなく、両者をとり結ぶところに一つの媒介的な働きをしている『物質的、社会的条件』を挿入してスポーツの全体構造を把握することがより妥当である」¹²⁾という。つまり、あそびの現象分析の枠組みである日常・非日常というカテゴリーの中間に、「物質的、社会的条件」という項を置いた三重構造としてスポーツを把握することが妥当であると考えている。しかし、スポーツを取り巻く状況がスポーツ産業の経営や地方自治体のスポーツ政策の影響などの政治・経済的な日常の事象と結びついているという理由からあげられているこの第3の分析項は、現実にはスポーツを成立させている現象的な要件としては存在するとしても、文化としてのスポーツ形式の構造という観点からは、外的な要因なのである。例えば、誰もが文化として認める芸術を例にとって考えてみると、その構造を分析するのに、音楽の演奏会場や絵画の展示会場の管理・経営や地方自治体のそのような催しに関する政策などを分析するであろうか。また、絵画制作の過程で用いたハケや絵の具を分析するであろうか。たとえ、このような芸術を取り巻く物質的・社会的条件を分析しても、それから明らかになることはおそらくその特定の社会、時代における芸術の意義や機能であって、芸術そのものの形式としての独自の普遍的な構造は見えてはこないであろう。したがって、文化としてのスポー

ツの構造を分析しようというのであれば、その対象はスポーツ形式そのものとなるべきであって、それを取り巻いている様々な要因にはならないのである。

また、増田は文化を「人間の精神活動の所産として、非日常性(日常の実用性を捨象し、日常有効性を後方に押しやった)と自然の疎外との過程を意識の上昇過程として辿り、観念の領域もしくはイマジネーションの領域に成立している」¹³⁾と捉え、スポーツの文化としての根拠を人間のイマジネーションである成文化されたルールによって成り立つ非日常的時空間に求めている。この捉え方は唐木の方法と類似しており、あそびという分析枠組みをもとに日常性・非日常性という二分法によって、スポーツの活動形態の特性を見ようとするものである。ただ、唐木と異なるのは増田が日常生活レベルにおける実用的効用性を文化という視点から見ると転倒した位相にあるとする点である。¹⁴⁾彼は、この例として体力づくりや健康づくり、コミュニティづくりなどの実用的利用・効用をあげている。唐木がこのような日常との関わりをも文化の特性として捉えているのに対して、増田は日常との関わりが文化の否定につながるかと考えているのである。しかし、ある文化が日常的な実用性に向けられる場合、それは現象としての文化の問題であって、その文化を成り立たせている構造にはなんら影響を及ぼさないのではなかろうか。たとえば、かりにスポーツの実用性・効用性が強調され、結果としてその参加者の健康などを脅かすものとなったとしても、それは現象場面の事柄であり、文化としてスポーツを成り立たせている構造は不変なのである。また、増田はこのような実用的利用・効用は、ある文化が他の文化に収斂され、利用されることによって現実化され、その結果として収斂された文化の否定につながるかと考えているのであるが、そこには文化そのものと、それがあつたものに利用された結果の可否との混同があると考えられる。ある文化は他のものによる実用的価値を持ちうる。たとえば、スポーツが政治にとって利用価値を持つということは常にありうることであるが、しかし、それはただちにスポーツそのものの否定に直結するわけで

はない。こうした問題は、スポーツに関わる現実問題として生起するもので、文化としてのスポーツの構造は、それ自体独立して考察しなければならないのである。

スポーツの構造分析の際に注意すべきことは、現象形態としてのスポーツと、それを支える構造としてのスポーツとを明確に区別するという視点にある。この区別をしないかぎり、スポーツ活動の形態的な特性や、ある特定の時代におけるスポーツの体制やその社会における機能といった考察をもって由とする水準にとどまることになるのである。文化の現象形態と構造とが異なった位相にあり、同じレベルにおいて扱うことができないということは、たとえば、ソシュールが述べている言語におけるラングとパロールの関係を考えると理解できる。¹⁵⁾ 日本語を例にとれば、日本語を日本語たらしめている社会的システムとしての構造がラングであり、この構造のもとに様々な個人的実践として具体化された現象形態がパロールであるが、この両者は全く異なった位相にあるものであり、構造としてのラングを考察する場合に現象形態としてのパロールを同一レベルで扱うと、普遍的なものと日々変容するものとの同一視と同様に全く混乱したものになってしまうことになる。したがって、この関係と同様に、スポーツの構造を考察する場合にも実践として様々な様態をもって現われている現象の位相と、その背後に構造として存在している位相とをはっきりと区別しなければならないのである。以上を踏まえた上で、次節では「現象としてのスポーツ」と「構造としてのスポーツ」との力動的な関連性について論じられる。

5. 「現象としてのスポーツ」と「構造としてのスポーツ」の関連性について

カッシーラーは文化を「我々人間の経験を漸進的に客観化したもの」¹⁶⁾と定義している。この場合の人間の経験とは感情、情緒、欲望、印象、直観、思考、考察であり、ともすれば、こうした定義はこれまで見てきた文化概念のうちの伝統的

なものと同様に、文化を固定的なものとして捉える傾向を持つ。しかし、彼はこのように客観化されたものとして文化を固定的に把握しているわけではない。人間の経験は客観化されるとそのままの形で留まっているのではなく、その客観化されたものの上に新たなる経験の客観化が積み重ねられていくように、ある意味においては弁証法的な性格を持つものとして理解している。このことは、彼が「けっして単純な事象ではなく、また、けっして静止した結末ではなく、文化は絶えず新たに始まらなければならない」¹⁷⁾と述べていることから理解できる。つまり、文化は結果ではなく、「営為」としてダイナミックなシステムを持つ存在として捉えられているのである。ここでは個人が感じ、欲し、考えることが客体化されると、ある精神的な表現（＝人間的能力の表現）として捉えられていることになる。この精神的なものはこれに親縁的で感受力のある主体に出会うと、再びその素材の被いから開放されて、新しい活動へとよみがえらされるのである。例えば、ある偉大な詩人が自己の感じ、欲したことを作品として客体化した場合、その詩人と同様な感受力を持つ人間がその作品に触れたときには、その作品は偉大な詩人の精神を開示すると共に、別の詩人によってそれが引き継がれ、更にはその詩人によって新たな精神表現に導かれるのである。つまり、ある人間個人の能力はそのまま子孫に遺伝するのではなく、その能力は客体化を通して文化に摂取されることを通じてのみ存続し続けるのである。言い換えるなら、文化は持続的形成として存在しており、「ある成果が起因している創造的意志と創造的活力とは、その成果のうちで生き続け、そして常に新しい創造物へとさらに続いている」¹⁸⁾のである。カッシーラーは、このような文化を通じてのみ、個人個人が変容し、人類が人間としての「組織形成」に至ると考えている。つまり、個人の内部でのみ発展する諸能力が文化として客観化され、持続的に受け継がれていくことを通じて、人類全体の関与する諸方面の継続的な発展につながっていくのである。これが各文化形式の力動的な構造として捉えられよう。

スポーツにおいて客体化されるもののうち、特徴的なもののひとつは「運動様式」である。運動様式とは身体的能力のうち、体力とか知力でなく、形式に関わるものが疎外され、自立的に存在しているものである。¹⁹⁾ 野球の試合など限られた時間空間で現出するスポーツの現象形態に目を向ける限り、それは試合終了や時間切れなどを境にその場かぎりで消え去るもののように見えるかもしれない。しかし、実際には、個人の身体的能力が運動様式として客体化されると、その運動様式はそのまま固定的に存在しているわけではない。運動主体のなかで発展的に展開されるとともに、その運動の遂行者に類似した感性や能力を持つ別の人間がその運動様式に接し、把握した場合には、その様式はそれを創出した主体の能力を開示すると共に、その別の人間によってそれが引き継がれ、より高次の段階へと導かれてゆくのである。このことは体操競技を例にあげると、ある優れた競技者が彼独自の技を客体化した場合、その競技者と類似した感性や能力をもつ別の人間がその技を把握したときには、その技はその創始者である優れた競技者の身体的能力を開示するとともに、それを把握した別の人間によってその技が引き継がれ、さらに新たな能力に基づく技として客体化される。そして、この技はまた別の新たな人間によってより高次のものへと導かれてゆくのである。つまり、スポーツ現象場面においては、個人の身体的能力は技能としてその有機的存在としての個人とともにあり、個人の能力の消滅とともに消え去るものであるが、文化としてのスポーツの構造において、それは個人の枠を越えて技として形成的に受け継がれていくものなのである。このようにスポーツは、客体化された技能とそこに吹込まれた精神が弁証法的に展開し、常に新たな技の創造へと発展するという構造をもつ文化であると言える。

また、スポーツは、他の文化形式がその他の文化形式によって置き換えられることができないのと同様に、固有の世界を形成し位置付けている。つまり、スポーツも混沌とした現象界においてスポーツという形式を通して意味付けするという独自の形成的な意味付与機能を持っているのであ

る。このことからスポーツもカッシーラーが言うところの象徴機能、つまり、単なる現象の存在に意味を与え、それを表出する多様かつ可変的な機能を担っていると考えられる。つまり、スポーツは、この機能によって独創的に創られ、かつ独自の自立的原理をもった像＝世界 (Bildwelt) であり、象徴形式として存在していると捉えられる。そして、前述のようにスポーツ形式を通じて、人間個人の生物学的レベルにおける組織変更が、その個人のレベルを超越して人類の組織形成にまでつながるのである。したがって、文化の一形式としてスポーツは独自の持続的形成的な構造をもつ「営為」として、私たちの世界において機能的に存在していると考えられることができる。この構造を図示するとすれば図2のようになると思われる。

しかし、カッシーラーが「形式というのは、その特殊化に際しては一度に与えられることはできなくて、形式の存立はその生成と生成の法則においてのみ姿を現わすものである」²⁰⁾と述べているように、形式の特殊性は、その形式の構成を規定する法則、言い換えると「内的形式」によって保証されるのである。したがって、諸文化形式におけるスポーツ形式の特殊性とその意義を明らかにするためには、スポーツの「内的形式」の解明という問題が必然的に立ち現れてくるが、この問題は今後の課題として残っているのである。

図2：文化としてのスポーツの現象と構造

脚 注

注1) 近藤は「わが国においては、体育・スポーツ的事象についての概念が、体育、スポーツ、保健体育、身体文化、運動文化、スポーツ文化など多様であり、その概念規定もまちまちである」²¹⁾と指摘しているが、この原因としては、各論の成立の根拠や外来語と訳語の間の障害などがあるようである。また、スポーツ文化、身体文化、運動文化の概念について大まかではあるが、今村が次のように述べている。「運動文化はスポーツ文化より広い概念であり、スポーツのほかに、徒手体操や舞踊など、労働とは区別された身体活動に関する文化を意味している。身体文化はさらに広い概念であり、スポーツやそれ以外の身体活動のほか、身体健康・安全などについての配慮に関することがらをも含んでおり、『体育』の内容とほぼ同義である」²²⁾

注2) カッシーラーは「われわれは等しくすべての象徴形式を支え、本質的にその進化に関係をもっている一つの法則に出会う。どの象徴形式も、最初から分離し独立して認められるような形式として生じるのではなく、そのひとつひとつが最初は神話という共通の母体から発生しているのに違いない」²³⁾と述べている。彼は文化を象徴形式として捉えており、神話が諸文化の共通の母体であることを確信している。

注3) カッシーラーは、形式をその中に何かを入れる器のように固定的なものとしては捉えていない。このことは彼が、形式とは「能動的で形成的な真に創造的な契機をあらわすので、固定したものとしてではなく生動的で可動的なものとして理解されなければならない」²⁴⁾と述べていることから明らかである。しかし、生動的で可動的であるといってもそこにはなんの制約もないという意味ではなく、形式の特殊化に際しては、それ独自の生成の法則に従っていると捉えている。

注4) 彼は精神を実体的にはとらえておらず、機能として捉えている。このことは彼が、「人間の本性または『本質』に関するなんらかの定義があるならば、この定義は、機能的なものであって実体的なものではないとしてのみ解し得る」²⁵⁾と述べていることから理解できる。したがって、本稿において「精神」と言う場合、それは「人間的能力」として解釈されてもよい。

引用文献

- 1) 近藤英男, 近代スポーツの基調と表現, 女子体育, 第5巻第2号, pp.21-22, 1963
- 2) 唐木國彦, 運動文化とは何か, 「体育原理講義」, 中村敏雄・高橋健夫編著, 大修館書店, 1987, p.66
- 3) 唐木國彦, 文化としてのスポーツ, 「スポーツの概念」, 不昧堂, 1986, p.235
- 4) 江橋慎四郎, 運動文化論の検討, 体育の科学, 第15巻第9号, p.496, 1965
- 5) 佐伯聰夫, 文化としてのスポーツとその指導, 「コーチのためのスポーツ人間学」, 勝部篤美・糸野豊編, 大修館書店, 再版, 1983, p.206
- 6) E. Cassirer, Zur Logik der Kulturwissenschaften : 5 Studien, 4., unveränderte Auflage, Darmstadt : Wissenschaftliche Buchgesellschaft, 1980, s. 127
邦訳: E. カッシーラー, 「人文科学の論理」, 中村正雄訳, 創文社, 1976, p.170
- 7) E. カッシーラー, 「象徴形式の哲学 第一巻 言語」, 生松敬三他訳, 竹内書店, 1972, p.11
- 8) 同上, p.15
- 9) 前川峯雄, 運動と文化に関する一考察, 体育の科学, 第11巻第3号, p.107, 1961
- 10) 前掲, (3), pp.239-242
- 11) 同上, p.241
- 12) 同上, p.253
- 13) 増田靖弘, 「伝統文化」と「スポーツ」, 体育

- 科教育, 第29巻第1号, p.32, 1981
- 14) 同上, p.32
- 15) 丸山圭三郎, 「ソシュールの思想」, 岩波書店, 1983, pp.83-92参照
- 16) E. カッシーラー, 「象徴・神話・文化」, 神野慧一郎他訳, ミネルヴァ書房, 1985, p.200
- 17) 前掲, (6), s.109, 邦訳, p. 145
- 18) 同上, (6), s.127, 邦訳, p. 170
- 19) 佐藤臣彦, スポーツの概念に関する基礎的研究(その2) —スポーツの類概念としての運動様式とその範疇論的分類の試み—, 日本体育学会第35回大会号, 1984, p.61参照.
- 20) E. カッシーラー, 「アインシュタインの相対性理論」, 山本義隆訳, 河出書房新社, 1981, p.125
- 21) 近藤英男, スポーツ文化とは何か, 体育科教育, 第29巻第1号, p.10, 1981
- 22) 今村浩明, 文化としてのスポーツ, 「国民スポーツ文化」, 影山健他編, 大修館書店, 再版, 1979, p.30
- 23) E. カッシーラー, 「言語と神話」, 岡三郎・岡富美子共訳, 国文社, 1981, p.71
- 24) 前掲, (20), p.125
- 25) E. カッシーラー, 「人間」, 宮城音弥訳, 岩波書店, 改版, 1982, p.96